

放射線科救急撮影の現況

放射線科技師長 堀 勇 二

平成9年第5巻第1号で平成6年～8年の3年間について報告をしたが、その後地方センター病院の指定、一般病棟40床の増床や人工透析の増床、又、内科・外科をそれぞれ分離し4科へと診療科の充実を図ったことにより、急性期治療を必要とする患者さんの入院が多くなってきた。それに伴い一般の検査はもとより救急撮影の割合も徐々に増えてきている。

今回、平成9年～11年までのデータが揃ったので報告をする。救外・病棟検査では、平日の救急検査が30%で休日救急検査が約70%とこの6年間殆ど同じ状況である(表1)が、救急外来と病棟との関係では、一般撮影では救急外来が45%から53%へと伸び、CTでは70%以上が救急外来である。平成11年の検査内容を見てみると、一般撮影では胸部・腹部で3221件63.6%、骨その他1228件24.3%で約90%を占めている。しかし、胸部・腹部撮影での約59%が病棟ポータブル撮影で、年々件数も増えてきている(表2)。

CT検査では過去最高を記録し、頭部750件82.1%、腹部102件11.2%で殆どを占めている。全CT件数(1月～12月)7531件中救急及び病

棟時間外が913件あり、12.1%を占めている(表3)。

救急Angioでは、平成9年が少し多いが大きな変動はないように思われる(表4)。

全検査件数から見た救急外来及び病棟時間外は、平成9年では9.55%、平成10年では8.5%、平成11年では6035件で9.75%となっており、平成6年の6.57%から見ると少しずつ増えてきている。

これらのデータから今後を推定してみると、微増ではあるが全体の件数は毎年増えていくものと予想される。病院の診療体制も年々充実されてきていることもあるが、軽度のものから重度のものへと全てに対応せざるを得ない地域事情もあるように思われる。

平成12年から祝日の法律が変り、正月休みを始めとして連続しての休暇が多くなり増々負担が大きくなっていく。前回の報告にも書いているが休日での対応は1名で行っていることもあり、これ以上の増加は大変厳しいものがある。救急外来は別として、増え続けている病棟ポータブル撮影の有無を先生方に精査して頂きながら、放射線科としても全力で対応したいと考えている。

表1 救外・病棟検査人数及び件数

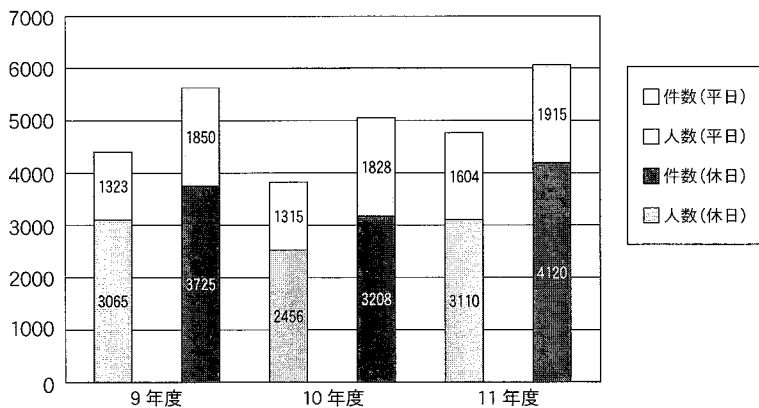


表2 一般撮影の救外・病棟人数及び件数の分類

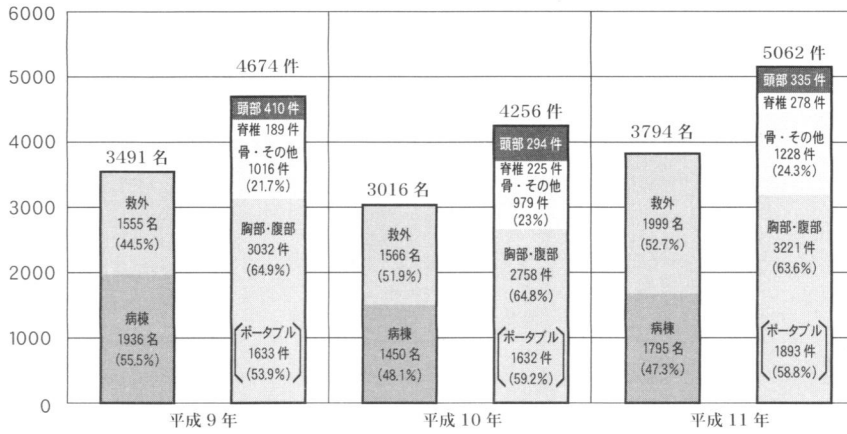


表3 救外・病棟CT検査の分類

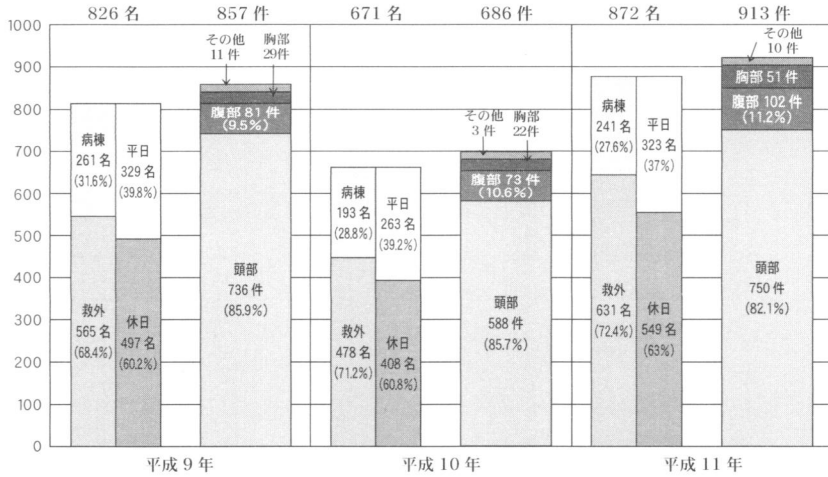


表4 救急Angio

